

市の鳥



カワラヒワ

# 広報 **えびな**

編集・発行  
海老名市役所広報広聴課  
〒243-04  
神奈川県海老名市勝瀬175  
☎ (0462) 31・2111



8月8日(土) 14:00~21:00

9日(日) 13:00~21:30

会場：市役所周辺

暑中お見舞い申し上げます。聞くところによると、毎日の暑さに心身ともお疲れのご様子とか。そんなときには、「この夏 元気なえびなです」をテーマにした「えびなふるさとまつり」に参加して「郷土の心」に触れ、あなたの元気を取り戻してください(関連記事4・5面に掲載)。

## 第17回えびなふるさとまつり









# フォトピックス

## ジャガイモを収穫

「わかば学園」児童が、心身障害児通園施設「わかば学園」の児童八人が、六月三十日、海老名みずほハイイツ南側の転作田で、ジャガイモを収穫した。これは、心身の発達に遅れのある子供たちにも収穫の喜びを味わってもらおうと、市農業委員会(赤井光夫会長、20人)と海老名みずほハイイツ自治会(村上昌男会長、20世帯)の有志が児童たちを招待したものである。



ジャガイモを手に思わずニコリ

水槽内では、体長十五二十センチのアユ六匹が元気に泳いでおり、来庁者は梅雨のうとうとしさをひととき忘れ、清涼感を味わっていた。このアユは七月末まで展示される。

市校所一階の玄関ホールに、水槽に入ったアユが展示され、来庁者の目を惹きつけている。

## 来庁者に好評

市庁舎にアユを展示

このアユは、相模川第二漁業協同組合海老名支部長・岡部好直さん(61歳)が提供したもので、岡部さんは「相模川の観光資源でもあるアユに親しんでもらおう」と十年前から水槽とともに、毎年アユ漁解禁後にアユを提供している。



水槽の中を元気に泳ぐ相模川のアユ

## 全校で田植え

門沢橋小のモチ米作り

六月二十七日、門沢橋小学校(加藤淳子校長、児童数50人)



1列に並んで苗を植える子供たち

で、全校児童による田植えが行われた。同校では体験学習の一環として、昭和五十三年から近くの水田十町を借りてモチ米作りを行っており、田植えは恒例の行事となっている。

当日は、午前九時から操業



第25回神奈川県青少年指導員大会

活発な意見交換が...

に着がえた子供たちが、次々水田に入り、横一列に並んで、二十センチほどに育ったモチ米の苗を一生懸命に植えていた。

低学年の子供たちの中には、田の中で思わず足を取られて「しりもち」をついてしまう子も見受けられたが、昼前には田植えを終了した。

なお、このモチ米は十二月に行われるもちつき大会で使われる予定。

## 有意義な1日

青少年指導員大会

「青少年にゆとりと活力を」とをテーマに、六月二十一日、市文化会館で青少年指導員大会が開かれ約千人が参加した。この大会は、各地域で青少年の健全育成活動に取り組んでいる青少年指導員が一堂に会して活動のあり方を研究協議し、地域活動の活発な展開を図ることを目的に開かれたもの。

午前中は表彰式などのほか、元全日本サッカーチーム監督・石井義信氏の講演「スポーツの原点」が行われた。

また、午後は「さらさら踊り」の atrak ショーに引き続き、学校五日制についてのパネルディスカッション(写真が行われている)が活発な意見交換がなされた。

身近なテーマを扱った大会だっただけに、参加者はそれぞれに有意義な一日を過ごしていた。



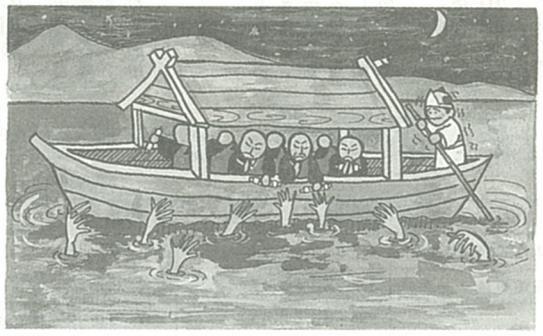
## 第284話

### 舟べりにすぎる水死者の手

河口の真水と塩水の境目は流れや波の動きが微妙で、経験も積んだ地元漁師や船頭でも遭難することがある。これをそとて仕事をする人たちは「魔がさした」というが、水面下の水の動きは複雑で、その道の専門家でもわからないというところがある。

河口付近で水難事故が多いのはそうした原因によるものだろうが、川師たちの中には今もって死霊が招くものと信じている人も多い。

また、二つの川の合流点は水質や水勢によって川底がさまざまに変化し、深さも流速も一定していないので、急に橋が届かなくなったり、夜行列が乱れて途中で分断したりしているのは大抵こうした場所である。難所と呼ばれるのは海老名でも鳩川の合流点と貫抜川の合流点が難所とされていた。



しかし、鳩川の合流する有馬神社の裏は、洪水の折などは身の毛もよだつような激流が渦巻く場所だったので、主が棲んでいると言われて平生もあまり近づく者はなかったが、貫抜川の合流する辺りは一見平凡な流れにみえたためか、水泳中や投網を打っているうちに溺死する者が多く、しかも仲間と一緒にいながら助けることが出来ず、大抵遺体は上がらなかった。

言うまでもなく、予期しない深さや流れの変化によるものだろうがこの地では大きな水蛇が呑んでしまうという言い伝えが信じられていた。この辺りは昔、よく投身自殺する者が多かったが、やはり殺があったそうだが、やはり遺体が見つからないことが多かったというところである。遺体がなくなるとして投身自殺がわがかるのか、と古者に尋ねたら、投身者は入水した場所に履物をきちんとそろえておくものだ、きちんとそろえて飛び込むのはどうもいまいましい心理なのだろうが、当人以上にはわからないことである。

世の中が泰平だったためたまたま、元禄以降、お宮やお寺へ釣り鐘を奉納したり、石仏を立てて無縁仏を弔ったりするものが盛んに行われたが、僧侶による悪戯鬼なども頻りに行われた。

相模川に灯籠を流す川流儀は例年の行事になっていたが、これは水死者の霊を慰めるため、七月十五日の送り盆の晩に近郷の寺の住職たちによって行われたもので、百八の灯籠に次々に灯を入れて水面に浮かべると、流れに乗った灯籠は一定の間隔を置いてはるか川下まで延々と続き、その灯の列は、さながら迷える霊魂を浄土へ導くが如く闇の中に輝いた。

最後の灯籠を流した後、僧侶たちは屋形船に乗り、詠経しながら流れにまかせてその後に従ったが、選ばれた老練の舟頭が経籠子に身を包んで棹を握ったのは、三条の川の渡し守になぞらえたものだったのだろう。

**海老名むかしむかし**  
 ☎33・3838  
 電話で海老名の昔ばなしが聞けます。  
 7月3日～7月17日 第117話 狐のいたずら  
 7月18日～8月3日 第118話 二神将の腕